

ヴィトゲンシュタインと言語の写像理論

越 沢 浩

1

Ludwig Wittgenstein の言語観は、初期のものと後期のものと2つあり、そのおのおのがいずれも 20 世紀前半におけるイギリス哲学の重要な学派の源になっていると言っても過言ではない。言語と哲学が密接な関係を持っていることは、ギリシアの昔からの哲学史を見れば明白である。ただその言語に対するアプローチが言語学者と哲学者とでは異なっていることはもちろんである。しかし言語学あるいは文学に対する哲学者の言語観の影響、逆に文学、言語学の哲学に及ぼす影響は無視することができないのである。⁽¹⁾

初期の Wittgenstein は *Tractatus-Logico-Philosophicus* (1922) (論理哲学論考, 本論では論考と略称する) に、後期の Wittgenstein は *Philosophical Investigations* (1953) (哲学探究, 探究と略称する) に代表されている。きわめて図式的に述べれば、『論考』は 1930 年代の論理実証主義のいわばバイブルであると言われており、1950 年代の Oxford を中心にした言語哲学、あるいは日常言語学派は『探究』によって大きな影響を受けていると言ってよい。この簡単な説明からだけでも、Wittgenstein が現代英国哲学に対して、いかに偉大で、広範な影響を及ぼした人であるかが推測できよう。最初にその生涯を略記して、Wittgenstein の人柄を紹介して見よう。

1889 年 4 月 26 日、ウィーンで生まれた。父は Karl Wittgenstein (1847-1913)、ユダヤ人で Protestant、母は半分ユダヤ人で Catholic に属していた。Ludwig Wittgenstein は幼時に Catholic の洗礼を受けているのである。8 人兄弟の末っ子であって、兄 4 人、姉 3 人であった。3 番目の兄までは皆自殺した。もう 1 人の兄、Paul (1887-1961) は片腕のピアニストとして後年有名になった。Karl Wittgenstein はオーストリアの鉄鋼業界で指導的地位についた富豪である。Wittgenstein 家は代々音楽愛好家揃いであって、Johannes Brahms, Clara Schumann がその家を訪れている。

Wittgenstein もクラリネットが上手であったという。1903年から1906年まで Linz の実科学校、続いて Berlin の Charlottenburg にある Technische Hochschule に進み機械工学を学んだ。1908年渡英、秋に Manchester University 工学部に研究生として登録、1911年まで在籍する。学問的関心は工学から数学、そして数学基礎論へと移って行き、1911年秋、Frege を Jena に訪れて意見を聞くと、B. Russell の下で学ぶように勧められる。1912年、Cambridge University に学部学生、次に大学院学生として登録する。B. Russell および G. E. Moore の指導を受ける。1914年、第一次世界大戦が起こると、オーストリア・ハンガリー軍の砲兵連隊に入隊。1918年捕虜となるが、『論考』を脱稿する。1919年復員して、ウィーンの師範学校に入学する。1920年師範学校修了、9月からオーストリアの田舎の村の小学校で教員生活を送る。1926年4月に小学校教師を退職。その間、様々な曲折を経て、*Tractatus-Logico-Philosophicus* が、1921年にドイツ語で、*Annalen der Naturphilosophie* 誌に掲載され、1922年に独英対照版で、B. Russell の序文を付して Kegan Paul 社から出版された。教員退職後は姉のために邸宅を建築したり、友人の彫刻家のスタジオで彫刻を学んだりした。Wittgenstein は『論考』によってすべての哲学的問題を解決したと思ったからである。しかし『論考』の出版によって、Wittgenstein の哲学はイギリスおよびウィーンの哲学者の間に影響を与え始めた。Frank Ramsey が1923年から何度か Wittgenstein と会って討論を交わしており、ウィーン大学の Moritz Schlick が1925年以後 Wittgenstein と接触を持つようになった。Schlick はいわゆるウィーン学派 (Vienna Circle) の創業者であり指導者であって、Wittgenstein はその友人達とも関係を持つようになった。その中で最も強く Wittgenstein の影響を受けたのは Friedrich Waismann であった。

Wittgenstein の言うところによれば、彼が再び哲学にもどったのは、創造的な研究を行なう自信が持てたからだということである。このきっかけとなったのは1928年3月にウィーンで、数学の基礎に関する Brouwer の講演を聞いたことであった。Wittgenstein は1929年初期に、Cambridge University に着き、始めは研究生 (research student) として登録する。しかし戦前の在学期間を考慮すれば学位に必要な条件を満たすとして、8年前に出版された『論考』を対象論文として学位が授与された。1929年6月のことである。1930年には Trinity College の Fellow となった。それ以後、1938年にはイギリスに帰化し、1939年から1945年までの第二次世界大戦中は別として、1947年教授退職まで、研究および講義によって、特にイギリス、アメリカ、その他の英語圏の哲学者に大きな影響を与えた。しかしその講義も著作も独

特のものであって、少数のグループのものに討論の形式で哲学の諸問題を直接取り上げながら考察するというのがその講義であり、また Wittgenstein の本で生前出版されたのは『論考』だけであった。その他の著作は大部分ノートブックの形で原稿として残されており、Wittgenstein の死後弟子達の手によって次々と出版されているのである。たとえば『探究』は1953年に出版されており、これは死後2年過ぎているのである。

1933年頃に Wittgenstein の思想に根本的な変化が起こったことが推定できる。その事情を知る材料は *The Blue and Brown Books* (青色本・茶色本) (1933-1935) であって、出版は1958年である。これはいずれも講義の原稿であって、タイプライターで打たれたものが何部か関係者の間に流布していたものである。Wittgenstein の、いわば新哲学 ('new' philosophy) は『論考』の基本的な思想を否定するものであった。言語の写像理論、すべての有意な命題は要素命題の真理関数であるという原理、および語られざるものについての原理は捨てられることになった。この Wittgenstein の新しい立場に発展して行く動機となったのは、2人の友人の批評である。1人は前出の F. Ramsey であるが、彼は1930年に若くして世を去った。もう1人は Cambridge University の経済学の講師、イタリア人の Piero Sraffa である。しかし初期の思想には、いわば源となる思想、すなわち Frege と Russell の哲学があった。その時期の Wittgenstein の問題はすべて彼らの哲学に発しているものであったが、後期の『探究』における立場は全く独自の境地にあるものと言えよう。

1936年冬学期終了後 Norway で約1年間過ごす。Wittgenstein は第一次世界大戦の直前に、Bergen の北東、Sogn の Skjolden 近くの人里離れた所に小屋を作り、完全に孤独な生活をしたことがあった。この小屋で今度は『探究』を書き始めたのである。1937年に Cambridge にもどり、1939年に G. E. Moore の後任として教授の職に着くが、同時に第二次世界大戦が勃発した。彼は戦争を傍観することができず、London の Guy's Hospital で作業員をしたり (1941)、Newcastle の医学研究所で働いたりした (1943)。戦後1946年の初めから Cambridge University での講義再開。しかし Wittgenstein は大学での生活に満足できず、1947年の夏学期までで教授の職をやめることになった。正式には12月31日教授退任となっている。彼はその後の余生を専ら研究に捧げることになる。1947年の冬はアイルランドの田舎の農場に住み、その後は西海岸 Galway の海岸の小屋で完全に孤独な生活をする。からだをこわして、1948年の秋には Dublin のホテルに移る。この時から1949年の初春までは非常に研究が進んだ。この時の原稿が『探究』の第2部となり、1945年にほぼ完成

していた第1部と合わせて、現行の『探究』となっているのである。1949年7月 Norman Malcolm の招待でアメリカ訪問。秋にガンであることが判明する。1950年 Oxford の G. E. M. Anscombe の家に滞在。1951年 Cambridge の Bevan 医師宅に寄寓。4月29日に死去。

以上非常に簡単な説明であるが、それでも Wittgenstein の人柄が分かると思う。並はずれた天才であることは、Russell および Moore が証言している。生涯自分の専攻する学問である哲学の研究を続けて止むことがなかった点については、Norman Malcolm の *A Memoir* (思い出) (1958) の最後の一節が見事に描いていると思う。死ぬ2、3日前、Bevan夫人に、Wittgenstein は「今までより以上に研究に専念するつもりだ」と言ったと述べてあるが、それに続いて、

On Friday, April 27 th, he took a walk in the afternoon. That night he fell violently ill. He remained conscious and when informed by the doctor that he could live only a few days, he exclaimed 'Good!' Before losing consciousness he said to Mrs. Bevan (who was with him throughout the night) 'Tell them I've had a wonderful life!' By 'them' he undoubtedly meant his close friends. When I think of his profound pessimism, the intensity of his mental and moral suffering, the relentless way in which he drove his intellect, his need for love together with the harshness that repelled love, I am inclined to believe that his life was fiercely unhappy. Yet at the end he himself exclaimed that it had been 'wonderful!' To me this seems a mysterious and strangely moving utterance.

p. 100

2

『論考』についての A. Kenny の評言を引用すると、

The twenty thousand words of the *Tractatus* can be read in an afternoon, but few would claim to understand them thoroughly even after years of study. The book is not divided into chapters in the normal way, but consists of a series of numbered paragraphs, often containing no more than a single sentence. The two most famous are the first ('The world is all that is the case') and the last ('Whereof one cannot speak, thereof one must be silent⁽²⁾').

ここで述べられている通り、『論考』の文章、約2万語は読むのに半日で十分であろうが、その完全な理解には数年の研究が必要であろう。Wittgenstein は賛成しなかったが、『論考』の哲学上の意味づけを明確にしている B. Russell の序文が言って

いるように、この本は視野の広さ、構想の雄大さ、洞察の深さによって、哲学界の偉大な成果と言われるものであるからである。また文体の簡潔で、無駄のないことから、非常に理解しにくい文章となっている。この本全体が章に分けられることはなく、番号を付けた命題が並べられているのである。しかし番号として付けられた小数は、その命題の論理的な重要性の度合いを表わしているのである。n. 1, n. 2, n. 3 等の命題は n 番目の命題に対する注であり、n. m1, n. m2 等の命題は n. m 番目の命題に対する注となる。このような区分の方法は、当時は奇抜なものと思われたろうが、それにならった区分をしている本は、現在時々見掛けることがある。

本論は Wittgenstein の哲学を論じようとしているのではない。それは専門の哲学者の仕事であり、また哲学を専攻するものでなくては全く理解不可能と思われる部分がある。言語に関心を持つものとして、Wittgenstein の言語観は非常に参考になると思う。それも本来ならば後期の思想が重要なのであるが、それを理解する前提として、初期の Wittgenstein を把握することが要求されるのである。この初期と後期との関係を重視する立場は David Pears や A. Kenny が代表している。全般的な Wittgenstein の言語観を考察するための第一段階として、ここでは『論考』における言語観に限定したい。

A. Kenny が引用している、『論考』の最初と最後の命題から話を進めよう。

1 The World is all that is the case.

(世界は成立していることがらの全体である)

7 What we cannot speak about we must pass over in silence.

(語りえぬものについては、沈黙しなければならない)

この命題は A. Kenny の言う通り非常に有名なものであるが、最後の命題は普通の読者にも理解し易い言葉である。次の命題と並べて考えれば意味はさらに明白になる。

5.6 *The limits of my language mean the limits of my world.*

5.61 (4) We cannot think what we cannot think; so what we cannot think
we cannot say either.⁽³⁾

(5.6) 中の *my language, my world* には哲学上の問題 (solipsism, すなわち唯我論, への傾向) が含まれているけれども、それを無視すれば一般的な意味に理解できないことはない。

最初の命題については、言語の写像理論と関係があるので、少し詳しく説明せねばならない。⁽⁴⁾

(1) のドイツ語は *Die Welt ist alles, was der Fall ist.* であるが、これに日本語訳を並べると、およそ文章の感じが異なってしまう。この命題の *the world, die Welt* についてはそれほど問題はないと思う。C. O. D. の説明によると、*everything that exists outside oneself* であり、常識的に言って、存在する事物・現象の総体のことである。問題はそれが *all that is the case* であるということなのだ。この意味については (2) を参照せねばならない。

2 What is the case—a fact—is the existence of states of affairs.

(与えられたことがら、すなわち事実とは、いくつかの事態の成立にはかならぬ) ここで言う *what is the case* と *all that is the case* とは同様な意味を表わすものと考えられる。すなわち *a fact* と同様な意味である。ドイツ語は *die Tatsache*。the existence of states of affairs に対するドイツ語は *das Bestehen von Sachverhalten* であるから、英語の *a state of affairs* に対するドイツ語は *der Sachverhalt* となる。

fact……Tatsache……事実

state of affairs……Sachverhalt……事態

この事実と事態の関係を明らかにしなければならない。それについては『論考』に付けられた B. Russell の序文が第一に参考になる。

What is complex in the world is a fact. Facts which are not compounded of other facts are what Mr Wittgenstein calls *Sachverhalt*, whereas a fact which may consist of two or more facts is called a *Tatsache*: thus, for example, 'Socrates is wise' is a *Sachverhalt*, as well as a *Tatsache*, whereas 'Socrates is wise and Plato is his pupil' is a *Tatsache* but not a *Sachverhalt*. p. xi

これによれば事実とは複合的なものであって、その部分として他の事実を含んでいることもあるし、含んでいないこともある。しかし事態は部分として事実を含んでいない。これがいわゆる *atomic fact* (原子事実) と呼ばれるものである。B. Russell の説明によれば、この原子事実は部分として事実を含んでいないが、部分を持たないわけではない。原子事実を理論的に徹底的に分析すれば、最後に到達する構成要素は *simples* (単一なもの)、あるいは *objects* (対象) と呼ばれるものである。たとえば 'Socrates is wise' について、これを原子事実とすれば、'Socrates' と 'wise' がそれに該当するのである。ここまで考えてくると、世界、事実、事態、対象の関係について、Wittgenstein が『論考』の中で、どのように述べているかを検討することが必要になる。それがまた言語の写像理論と密接な関連を持っているのである。『論考』

の(1)から(2.063)までの命題によって示されている世界観なのであるが、A. Kennyは便宜上 *Metaphysics of Logical Atomism* (論理的原子論の形而上学)と呼んでいる。

まず1つの命題を考える⁽⁵⁾。それに対して矛盾する命題を作る。この各命題に対応する事実があるが、それはただ1つだけである。この事実が命題を真あるいは偽にするのである。このような事実の総体が世界となる(1.1)。事実には *positive fact* (プラスの事実)、あるいは *negative fact* (マイナスの事実)がある。プラスの事実とは事態の成立していることであり、マイナスの事実とは事態の成立していないことである(2.06)。事態は対象あるいは *things* (物)の結合である(2.01)。そして対象が他の対象と結合して事態の中に現われ得るという可能性が、対象の本質であり(2.0123)、対象の内的な特徴であり(2.01231)、また対象の形式でもある(2.0141)。あらゆる対象はその本質の中に他の対象と結合するためのあらゆる可能性を含んでいるのだから、もし対象が与えられるならば、それとともにすべての対象もまた、すでに与えられている(5.524)、そしてすべての対象が与えられたならば、それとともにすべての可能な事態も与えられている(2.0124)。

対象は単一であって、部分を持たない、しかし対象は結合して複合的なものを作ることができる(2.02-2.0201)。対象は不動のものであり、存続し続けるものである、なぜならば可能などのような世界も、現実のこの世界と共通のもの、すなわち同じ対象を持たねばならないのだから。変化し、不安定なのは、対象の配列の仕方なのである(2.022-2.0231, 2.0271)。対象が相互に異なる場合は、その *logical form* (論理的形式)が異なる時、あるいは外的な特徴が異なる時、あるいは単に数量的に区別される時かである(2.0233-2.02331)。対象は世界の、不動で存続する形式、実体および内容を作る(2.021, 2.023, 2.024, 2.025)。対象は結合して事態を作り、その中では対象は特別な仕方では相互に関係し、鎖の輪のように相互に組み合わさっている(2.03)。対象が事態の中で結合している仕方が事態の構造である(2.032)。事態の形式とは、その構造の可能性である(2.033)。

事態は互いに独立している(2.061)。したがって、ある事態の成立ないし不成立から、他の事態の成立あるいは不成立を推論することはできない(2.062)。事態の成立および不成立が実在である(2.06)、そして事実の総体、すなわち実在の総体が世界である(2.063)。

以上が『論考』の冒頭に述べられている Wittgenstein の論理的原子論の考え方である。これに続く言語の写像理論、命題に関する理論はこの論理的原子論と不可分の

関係にあるのだが、Wittgenstein にとっては時間的にも、論理的にも、言語についての考察が先に来るものであった。言語観を検討することによって、その世界観が一層明確になるのである。また論理的原子論は本来 B. Russell の提唱したものである。B. Russell が1918年に行なった講演 *The Philosophy of Logical Atomism* は、Wittgenstein の初期の思想を非常に平明に代弁していると言ってよい。しかし両者の差異も見逃すことができないのである。今は論理的原子論についてこれ以上考察する余裕はない。

3

Georg Henrik von Wright の *Biographical Sketch* ⁽⁶⁾ (小伝) の中に、Wittgenstein が実在の映像としての言語の観念をどのように思い付くに至ったかを述べているところがある。これは後ほど、N. Malcolm も *A Memoir* (思い出) の中で言及していることなので、非常に重要な事件であると言えよう。Wittgenstein が第一次世界大戦中、東部戦線の塹壕の中にいる時、ある雑誌を読んでいると、その中に Paris における自動車事故の裁判の記事がのっていた。その裁判では、事故の小型模型が法廷に提出された。そこでは模型はいわば命題の役目を果たしたのである、すなわち a possible state of affairs (可能な事態) の説明として役に立っているのだった。小型模型の各部分 (模型の家、車および人々) と現実の物 (家、車、人々) との間にある対応関係によって、模型はこの働きが持てるのだった。Wittgenstein はそこで次のように考えた。この比喻を逆にしてもよいだろう、そして命題と世界との間と同様な対応関係によって、命題が模型あるいは picture (映像) の役目を果たすと言ってよいだろうと。命題の部分が結合している方法——命題の構造——は実在における要素の可能な結合、すなわち可能な事態を描くのである。

このようにして言語の写像理論が『論考』の中心的な原理になったのであるが、言語の本質および言語と世界との関係が Wittgenstein にとって終生重要な哲学的問題となるのである。簡単に言えば、言語は命題から成り立っていて、命題は世界を描く映像である。命題は思考の知覚できる表現であり、思考は事実の論理的な映像である。以上のことに要約されるのであるが、『論考』のテキストに添って最も重要と思われる点を検討して見よう。一般的な言語の写像理論は (2.1) から (2.225) までに述べられている。そしてさらに、思考および命題に適用されて行くのだが、その考察は別の機会に譲らねばならない。言語の写像理論の問題点は3つあると思われるので、そ

れを中心に論を進めよう。

第1の問題点は the pictorial relationship (描写の関係) である。

2.1514 The pictorial relationship consists of the correlations of the picture's elements with things.

(描写の関係は、事物に映像の要素をあてがうところになりたつ)

ここの描写の関係はドイツ語では abbildende Beziehung である。この命題の意味から考えて見よう。correlations とは correlate⁽⁷⁾ (互いに関連させる) の名詞だから、この日本語訳は適訳と言えない。相関関係と言った方が分かり易い。映像の要素は (2.13) および (2.131) で説明されている。すなわち映像の中において、対象を代表しているのが映像の要素であり、対象と対応関係にあるのが映像の要素なのである。前掲の自動車事故の例で考えれば、1組の小型模型で表わす映像がある。これが命題に該当する。すなわち

4.01 A porposition is a picture of reality. A proposition is a model of reality as we imagine it.

この映像、あるいは命題の要素は何かというと、模型の家、車あるいは人ということになる。この模型の家、車あるいは人をある特別な位置に並べると、それが事故の時の家と車と人との相対的な位置関係を表わすのである。そのような表現が可能になるためには、模型の家、車あるいは人が、それぞれ実在する家、車および人の代理をすることができねばならない。すなわち模型の描く映像の要素が、表現する状況の要素を表わさねばならない。これを描写の関係というのであって、これが映像を映像たらしめているのである。しかしそれだけでは十分でない。映像の要素は特定の仕方で相互に関係していなければならない。模型の人、車あるいは家の間の空間的な関係が、実在する人、車あるいは家の間の空間的な関係を表現しているのである。すなわち

2.15 (1) The fact that the elements of a picture are related to one another in a determinate⁽⁸⁾ way represents that things are related to one another in the same way.

映像の要素間の関係——すなわち映像の要素が特定の方法で関係していること——は1つの事実であることから、Wittgenstein は

2.141 A picture is a fact.

と言うのである。(2.15 (2)) によれば映像の要素のこのような結合が、the structure of the picture (映像の構造) と呼ばれるのである。結局1つの映像は描写の関係と

映像の構造を持っていて、それによって実在の世界を表現することになるのである。

第2に考察せねばならないのは、the pictorial form of the picture (映像がもつ描写の形式) である。ドイツ語は Form der Abbildung である。(2.15 (2)) で、描写の形式は映像の構造の可能性であると言っている。現実の映像を考えて、その構造だけが、すなわちその映像の要素が示す結合の仕方だけが描写の形式であるというのではなく、可能な映像の構造を含めて描写の形式というのである。

2.171 A picture can depict any reality whose form it has.

A spatial picture can depict anything spatial, a coloured one anything coloured, etc.

(映像はいかなる実在をも、描写できる。その実在の形式を映像が所有するかぎり。空間的な映像はすべての空間的なものを描写することができる、色彩的な映像はすべての色彩的なものを描写することができる、など)

模型の例で言うと、模型の示す現実の空間的な関係が映像の構造であろう。この空間的な関係の可能性という場合は、模型の持っている3次元の特徴を言うのであり、これが描写の形式となるのである。法廷で使われた模型と現実の交通事故が共通に持っているのはこの3次元の性質なのである。この共通の要素によって模型が道路における事故を表現できると言えよう。ここで Wittgenstein は、(2.16) から (2.17) において、実在を描写することができるために、映像が実在と共有せねばならないものが、映像の持つ描写の形式であると言うのである。すでに、描写の形式は映像の要素間の関係、すなわち映像の構造、の可能性であると説明された。そしてここでさらに、描写の形式が映像とその被写体との間の共通なものであるというのだから、描写の形式は映像の要素が互いに関係し合うのと同じ仕方でも物が互いに関係し合う、その可能性であると言ってよい (2.151)。

第3には logical form (論理的形式) ということについてである。Wittgenstein が映像 (picture) の例としてあげているものは、単に paintings, drawings, photographs, あるいはその他の2次元的な表現ばかりではなく、maps, sculptures, およびその他の3次元的な模型、さらに musical scores (楽譜) や gramophone records (レコード) のようなものまでである。そうとすれば描写の形式は非常に多様なものとなろう。非常に写實的、具体的なものから、きわめて抽象的なものまで含まれていると考えねばならぬ。しかし映像がたとい不正確にでも、実在を描写できるためには、映像と実在との間に共通でなければならぬ最小限度のものがあると考えねばならない。その最小限度のものが論理的形式なのである。

2.18 What any picture, of whatever form, must have in common with reality, in order to be able to depict it—correctly or incorrectly—in any way at all, is logical form, i. e. the form of reality.

(正しいにせよ誤りにせよ、およそ実在を描写し得るには、いかなる種類の映像でも、ともかくなにものかを実在と共有せねばならぬ。それが論理的形式、すなわち実在の形式にはかならない)

これを言い換えれば、映像の要素は、被写体の要素の結合関係に対応する仕方でお互いにある種の結合をすることができねばならないということなのである。この結合の仕方は描写の形式の相違によって異なってくる。たとえば楽譜を例にとってみると、頁の上に音符を左から右に並べることが音を時間的に並べることになる。音符を空間的に配列することは写像の形式の一部にはなっていない。音は空間の中にはないのだから。しかしながら、順番に並べるということは両者に共通である。Wittgenstein が論理的形式という時は、恐らくこの共通の、順番に並べるということを考えていたものと推測できるのである。

あらゆる映像はその被写体と共通の論理的形式を持たねばならないのだから、その映像は、空間的映像であるとか、2次元的な映像であるとかのほかに、論理的映像でもある。この論理的映像が前述の描写の形式と同様な性質を持っていることは、

2.2 A picture has logico-pictorial form in common with what it depicts.

(映像は描写の論理的形式を被写体と共有する)

2.203 A picture contains the possibility of the situation that it represents.

(映像は、それが表わす状況の可能性を含みもつ)

から理解できよう。(2.22) から (2.225) までは今後論を進めて行く命題についての、いわば予備的な説明と考えられる。映像の意味とはその映像の表わすところのものであり、映像の真とか偽とかは、映像の意味が実在と一致するか否かによって決まるといのである。これは命題の検証理論⁽¹⁰⁾と関連のあるところである。

4

5 A proposition is a truth-function of elementary propositions.

(命題は、要素命題の真理関数である)

これが『論考』の重要なテーマの1つになっているのだが、いわゆる真理関数の理論 (truth-function theory) は非常に専門的な領域に属する問題なので、説明するこ

とは控えたい。ただ命題と名辞 (name) について、論理的原子論と関連づけながら説明を行なって結論にしたい。

Wittgenstein が命題と言う時は、2つの側面があることに注意しなければならない。英語は proposition, ドイツ語は Satz である。第1の側面は、ある形式に従って配列したインクのしみとか、音声の配列であって、統一的構造を持つ事実として与えられ、知覚されるものである。第2の側面は、思考の表明であって、特定の意味を持つが、その意味自体は誰が、いつ、どこでその文章を話したかということには関係しない。Wittgenstein が第1の側面を強調する時は propositional sign (文一記号) という表現を使っている。ドイツ語では Satzzeichen である。

前述のように、命題は実在の映像であるのだから、映像の一般的特徴によって、命題、あるいは文章の中では、その要素——すなわち単語——が一定の仕方で互いに関係していなければならない。しかし

4.04 In a proposition there must be exactly as many distinguishable parts as in the situation that it represents.

The two must possess the same logical (mathematical) multiplicity.

(命題はそれが述べる状況と同じ割合に分割されなければならない。両者は同じ論理的 (数学的) 多様性をそなえていなければならない)

というように、命題が特定の状況についての命題となるためには、命題の要素とその表現する状況との間に1対1の対応関係がなければならないことになる。論理的原子論の説明中にあった通り、世界の基本的な構成要素は対象であり、それによって成立しているのが事態であるから、これとの対応関係にあるのは names (名辞) であり、名辞のみの結合、あるいは連鎖である elementary proposition (要素命題) でなければならない。この要素命題は単なる名辞の寄せ集めではない。それが事態についての命題となり得るのは、名辞が特定の仕方で並んでいるからであり、その命題には論理的な形式があって、それが原子事実の中の対象の配列の仕方と一致しているからなのである。命題の要素、すなわち名辞、を映像の要素と置き換えれば、それを対象と相関関係を持たせることによって、要素命題が実在の映像となるのである。ただ Wittgenstein の、ここで言っている名辞は、われわれが日常使う名辞あるいは名前とは非常に違うものである。要素命題の最小構成単位として、論理的に要請されたものである。したがって具体的にその例をあげることはむずかしいけれども、

3.202 The simple signs employed in propositions are called names.

(命題で用いられる単一記号は、名辞と呼ばれる)

3.203 A name means an object. The object is its meaning.

(名辞は対象を指示する。対象は名辞の意義である)

によって、Wittgenstein の意味するところを理解するほかはない。この章の冒頭に引用したように、要素命題の真理函数が命題であるということは、あらゆる命題がこの要素命題から導き出されるということにほかならない。そして

4.001 The totality of propositions is language.

ということと考え合わせれば、Wittgenstein の言語観、いや言語の写像理論が明らかになると思う。

Wittgenstein の『論考』を、その後に発達した言語哲学の観点から見れば、もはや歴史的な価値しかないであろう。言語観から考えても、Wittgenstein 自身が否定したという事実が象徴しているように、写像理論は歴史的な興味しかない。ただ『論考』を含めて、Wittgenstein の思想理解への第一歩として、言語の写像理論を考えて見たのである。

注

1. 'Without the early writings of Russell, G. E. Moore, and Wittgenstein, such influential works as Richards' *Principle of Literary Criticism* and its offspring Empson's *Seven Types of Ambiguity* might have never been written.'
E. W. F. Tomlin: 'The Prose of Thought', in *The Modern Age*, p. 232.
2. Anthony Kenny: *Wittgenstein*, p. 4.
3. 命題の番号について、() 内の数字は英訳の命題中の節の番号を示す。従って 5.61 (4) は命題 5.61 の第 4 節を表わす。M. Black の方法による。
4. 『論考』のテキストについては、独英対照の Kegan Paul 版であるが、その英訳は D. F. Pears & B. F. McGuinness のものとした。A. Kenny の引用中、最後の命題は Ogden 訳なので、本文中では D. F. Pears & B. F. McGuinness 訳に変えておいた。日本語は原則として坂井秀寿訳に従った。しかし英文だけで十分と思われるものには日本語をつけないことにした。
5. fact (事実) および proposition (命題) に関しては B. Russell の '*The Philosophy of Logical Atomism*' (1918) が非常に参考になる。*Logic and Knowledge*, p. 175-281.
6. *Ludwig Wittgenstein: The Man and His Philosophy* ed. by K. T. Fann, p. 18.
7. ドイツ語では zuordnen=beiordnen; adjoin, coordinate, assign.
8. ドイツ語では bestimmt; specified, definite.
9. 『論考』 4.013, 4.014 参照。
10. 初期の論理実証主義では、最も素朴な形で、有意味な命題とは、それが直接体験に還元さ

れ得る命題であると主張した。初期の Russell および Wittgenstein はこの立場に立っている。

参考文献

Wittgenstein の著作は除く。

1. Anscombe, G. E. M: *An Introduction to Wittgenstein's Tractatus* (1963)
2. Black, Max: *A Companion to Wittgenstein's Tractatus* (1964)
3. Fann, K. T. (ed.): *Wittgenstein, The Man and His Philosophy* (1967)
 _____: *Wittgenstein's Conception of Philosophy* (1969)
4. Kenny, Anthony: *Wittgenstein* (1973)
5. Malcolm, Norman: *Ludwig Wittgenstein : A Memoir* (1966)
6. Pears, David: *Ludwig Wittgenstein* (1969)
7. Russell, Bertrand: *My Philosophical Development* (1959)
 _____: *Logic and Knowledge* (1956)
 _____: *The Autobiography of Bertrand Russell*, 3 vols. (1968)
8. Metha, Vcd: *Fly and the Fly-Bottle* (1963)
9. *The Modern Age*, vol. 7 of The Pelican Guide to English Literature (1961).
10. L. ヴィトゲンシュタイン著, 藤本隆志・坂井秀寿訳, 『論理哲学論考』(1968)
11. 黒田亘編, 『ヴィトゲンシュタイン』(1978)
12. 『ヴィトゲンシュタイン全集』10 vols (1975-1977)